

やま ざき さだ きち

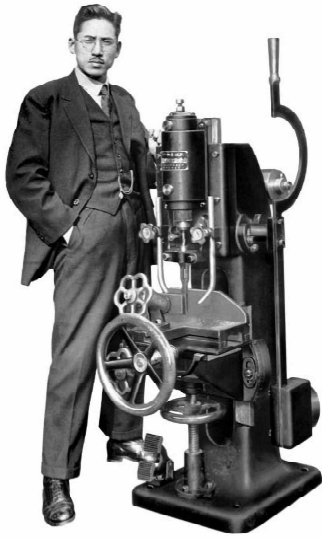
山崎定吉

工作機械に挑み続けた技術者

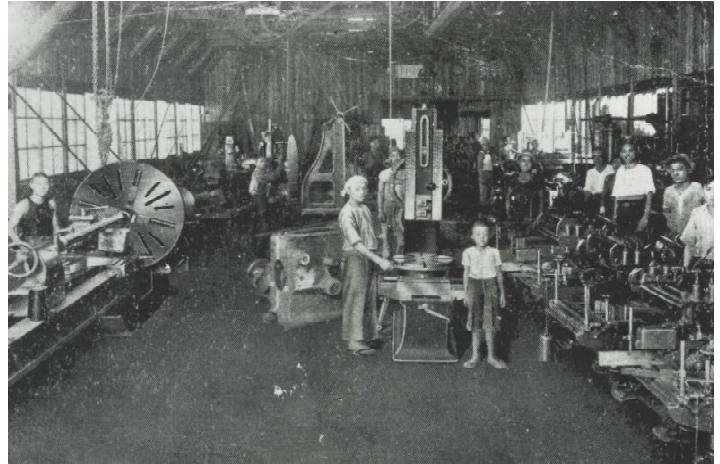
— 町工場から世界の工作機械メーカーに —

■ 機械工一筋の青年期を経て、名古屋で町工場開業

山崎定吉は、1894（明治27）年11月5日に石川^{だいしろうじまち}県大聖寺町（現・加賀市）の農家に生まれる。13歳のときに京都舞鶴の海運会社に就職。ほどなく北海道の日本製鋼室蘭製作所に入社し、工作機械に初めて触れる。砲身を旋削する100尺^{せんぱん}旋盤という超大型旋盤を扱い、旋盤工としての腕を磨き、20歳代半ばに名古屋の愛知時計電機に旋盤工として転職。1919年の25歳のとき、腕利きの旋盤工として一念発起し、名古屋市中区



山崎定吉（1894～1962）
写真：ヤマザキマザック（株）提供



1935年頃の山崎鉄工所の機械工場（右から3人目が山崎定吉）
写真：ヤマザキマザック（株）提供

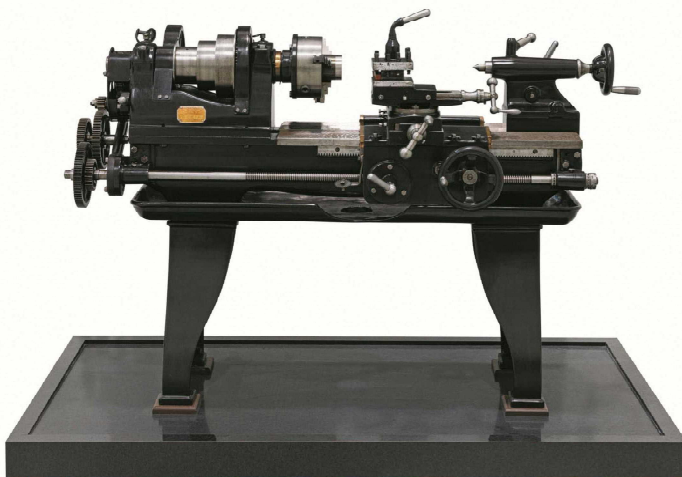
で鍛冶屋（鉄工場）を始める。旋盤3台、従業員1人の鉄鍋を旋削加工する小さな町工場であった。

そして間もなく、30坪の工場を間借りして「名古屋山崎式製量機」の看板を掲げ、^{せいりょうき}製量機の製造に乗り出す。この成功をもとに、1923年に名古屋市熱田区に工場を移転して山崎鉄工所を立ち上げる。製量機のほかに木工機械の製造も手掛け事業を拡大する。のちに職工が語るに、儲けたお金はすぐに機械に化けると言われたほど、定吉は設備拡充に意欲を示す生粋の機械工、機械好きであった。

■ 1927年「ベルト掛け山崎旋盤」製造、「世界のヤマザキマザック」への第1号機

山崎鉄工所が工作機械製造を始めたのは1927（昭和2）年であった。外販第1号は、安井ミシン兄弟商會（現・ブラザー工業）から受けた旋盤1台の注文であった。定吉は、早くからそれを見越したかのように工作機械製造を視野に入れた動きをしていた。前年の1926年当時には、4尺旋盤2台、8尺旋盤2台、20インチボール盤、20インチ^{かたけづりばん}形削盤、10尺^{ひらけづりばん}の平削盤など、機械をつくるための機械をしっかりと揃えていた。定吉は、単なる機械好きではなかったのである。注文を受けた同年中に社内用の「ベルト掛け山崎旋盤」第1号機を製作、翌1928年に同型機を注文先に納入する。

工作機械製造のうわさは広まり、1931年には名古屋市中川区に新工場を取得し需要に応えた。1937年には海軍^{こうしやう}工 廠指定工場ともなった。しかし1938年公布の「工作機械製造許可会社」の指定外となり、工作機械製造を断念。加えて戦災によって故郷に疎開せざるをえなかった。



1927年製造の「ベルト掛け山崎旋盤」（ヤマザキマザック工作機械博物館展示）
写真：ヤマザキマザック（株）提供

1947年に名古屋に戻った定吉は、中古機械の修理販売が当たり、1949年に息子^{てるゆき}照幸（後の社長）とともに（株）山崎鉄工所を設立。1959年に再開した旋盤の試作第1号機を完成させ、その後のヤマザキマザックへと発展する基礎となった。波瀾万丈の人生を展開した定吉は、常に機械を愛し機械とともに生きた人物であった。

（天野武弘）